



こい が くほ むら ぶん すい
恋ヶ窪村分水



西国分寺駅から徒歩 10分 (約 800m)



恋ヶ窪村分水入口



ほり堀のようす



ゆうほどう遊歩道

イラスト：富沢好

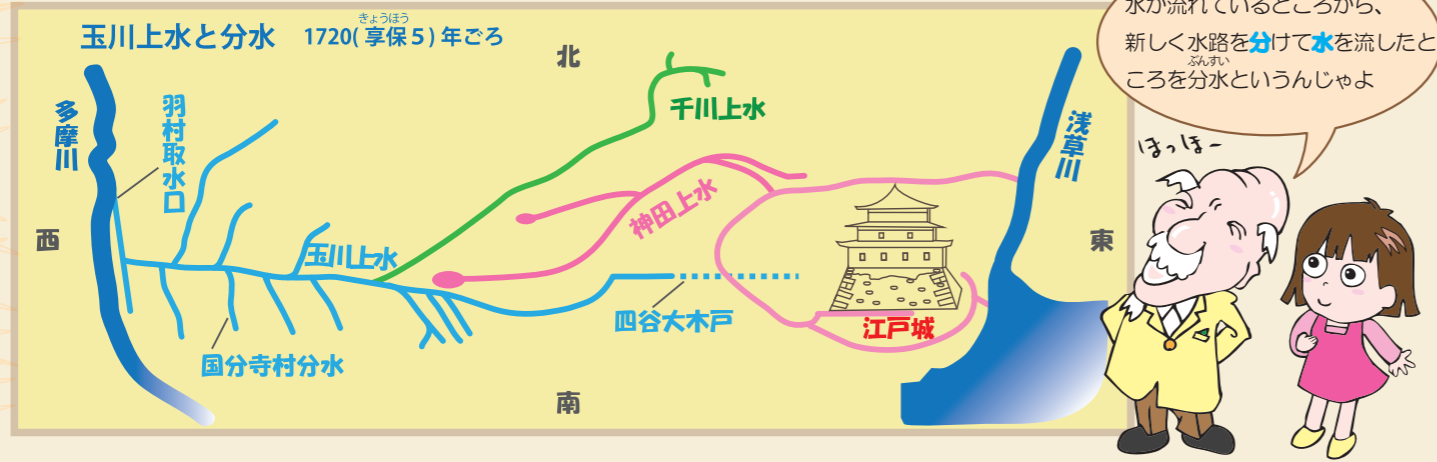


すごい！ ふかほ深く掘ったにや〜

たまがわじょうすい えどじだい じんこう すいろ
玉川上水は江戸時代につくられた人工の水路です。国分寺市内に玉川上水は通っていませんが、上水から水路を分けてつくった分水が巡っています。恋ヶ窪村分水もその一つです。

たまがわじょうすい
玉川上水ってなあに？

玉川上水はおよそ350年前の江戸時代につくられた人工の水路です。江戸の町にたくさんの人が住むようになると、飲み水をはじめ人びとが生活するための水が不足しました。この問題を解決するためにつくられたのが玉川上水です。その長さは約43km。羽村（今の羽村市）に水の取り入れ口をつくって水量の豊富な多摩川の水を引き、四谷大木戸（今の新宿区）まで飲み水を運んだのです。徳川家康が幕府を開いてから約50年後の1654（承応3）年に完成しました。



玉川上水を頼りにつくられた分水

国分寺市のある武蔵野台地は水にめぐまれず、わき水や野川の近くに人がわずかに住むだけのあれはた土地でした。江戸時代に武蔵野台地のまん中を流れる玉川上水が完成すると、上水を頼りにさまざまな理由で分水がつくられます。国分寺市内を流れた分水のうち、当時すでに村があった場所を流れる国分寺村分水は、農業用水として使うことを目的につくられました。一方、幕府の命令で新田開発がさかんに行れる中でできた新しい村（新田）に流れる他の分水は、そこに住む人びとの飲み水用につくられました。



えだ こいがくぼ むらぶんすい
国分寺村分水が枝分かれした1つ、恋ヶ窪村分水

恋ヶ窪村分水は、国分寺村分水が3本に分かれたものの1つです。水路の長さは約1kmで、東恋ヶ窪5丁目の恋ヶ窪交差点付近から南に下り、西恋ヶ窪1丁目まで通っていました。このあたりは江戸時代に恋ヶ窪村があり、田畑に水を引くために利用されました。

水路は途中、土地の低い谷と小高い丘を通りました。土地の高い丘の部分が現在の熊野神社北側あたりです（図「国分寺市の分水の様子」参照）。谷を通った水を丘に送りどけるためには、低い谷に合わせて土地を深く掘る必要がありました。つくられた堀は玉川上水の分水の中でも規模が大きいものとなっています。

分水は約300年のあいだ利用されました。昭和40年代に入るとその役目を終え、水の流れは途絶えましたが、堀は江戸時代当時の形を残しています。

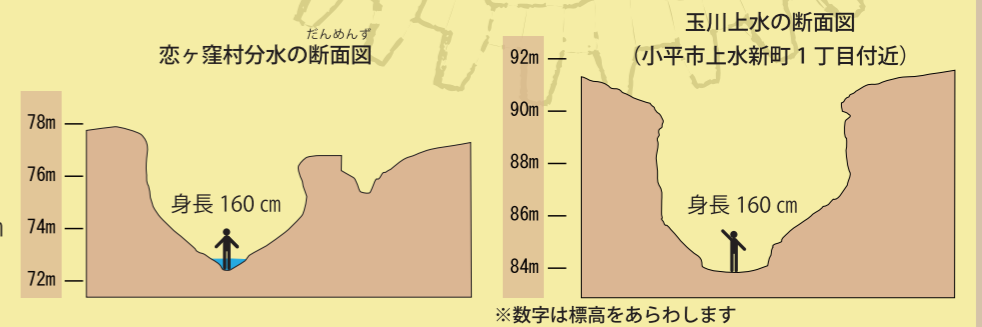
国分寺村分水

玉川上水にある江戸時代につくられた33か所の分水のうち、2番目に古い分水です。

1657（明暦3）年に国分寺村と恋ヶ窪村・貫井村（今の小金井市内）が一緒に分水をつくることを幕府へ求め、今の小平市から玉川上水の水を分けてつくられました。6kmほどの長さを持ち、水路は途中で恋ヶ窪村と貫井村へも分かれたことから、国分寺村外二ヶ村組合分水とも呼ばれています。

恋ヶ窪村分水の堀の大きさ

恋ヶ窪村分水の堀の大きさは小平市を流れる玉川上水と同じくらいですが、水が流れていたのは底からわずか50cmほどでした。



かんけい おも
恋ヶ窪村分水に関係する主なできごと

年代	こと
1603	徳川家康が江戸に幕府をひらく ～うめ立てによるまちづくりが始まる～
1654	玉川上水ができる
1657	明暦の大火がおこる ～江戸のまちのほとんどが焼ける～
1657	国分寺村分水ができる
1722	新田の開発が進められる ～この後、武蔵野に新田が多くつくられる～
1803	恋ヶ窪村分水がつくられる
1868	江戸が東京とあらためられる
1871	国分寺村分水の水の取り入れ口が砂川用水に変わる
1960年代後半	恋ヶ窪村分水が使われなくなる
2003	玉川上水が国の史跡に指定される
2017	恋ヶ窪村分水が市の重要史跡に指定される

